

# 姓名の比較文化論—タイと日本

クロスカルチャーコース 東 由佳梨

指導教官：谷川 昌幸（政治学ゼミ）

## 《目次》

### 第1章 名とは

第1節 名とその意味

第2節 名の種類

第3節 名前と人間

—名づけという行為

### 第2章 タイと日本

第1節 タイの地理

第2節 タイの歴史

第3節 タイ人の名

第4節 タイにおけるニックネーム

### 第3章 日本と名

第1節 日本の名の歴史

第2節 名字大国日本—名字からみえてくるもの

第3節 日本の大学生と名

—アンケートからみる現代日本人の名に対する意識

### 第4章 タイと日本—名の先に広がるもの

## 《論文制作にあたり》

きっかけは自分の名であった。この世に存在するものには名がついている。とりわけ人間にはそれぞれ固有の名がついている。私にも東由佳梨という名がある。ある時ふと、なぜ私はこの名をまとい生活しているのか考えるようになった。私の名に対する関心は日々高まり、もっと名に関するおもしろい事情、文化を知りたいという思いが芽生えた。

そんな中、私は新しい名の文化を偶然訪れていたタイで目の当たりにした。タイ独自の名に対する意識、世界でも珍しい使用方法があることを知った衝撃はとても大きく、日本とタイ、ふたつの国の“名”の背景にあるものを探り、研究を進めた。私はこの卒業論文で姓名を取り上げ、研究を進めていくにつれてますます“名”に惹かれていった。

## 《第1章 名とは》

一口で、“名”と言っても、名には様々な意味が含まれており、そして種類も多様である。まず様々な名が持つ意味、使用方法を明確にし、名と人間との関係を考える。名を付けるという行為は最も人間的な行為であり、名付けには名付け親の期待や思いが重々に組み込まれている。人間に与えられる各々の名は、一人の人間がこの世に存在する上で社会に所属することを確認するのだと認証するためには不可欠なものである。人間が与えられる最初の社会的な贈り物であり、世界にたった一つしかない、存在価値が非常に高いものであることを実感せざるをえない。

## 《第2章 タイと名》

2004年、そして2005年。私は2度にわたりタイを訪れた。実は、2004年初めてタイを訪れる際にはタイという国に対して、いかにもアジア色の強い東南アジアの一国だという認識しかなかった。特別に興味や関心があったわけではない。しかし、思いがけず名に興味を持つ私にとって衝撃的な文化と出会った。タイ人は私達日本人の常識とはかなり違った価値観でチューレンというニックネームを使い生活している。一瞬で私の中でこの文化についてもっと触れたい！という気持ちが膨れ上がり、2005年11月。再び私はタイのバンコクを訪れ、幸運なことにタイ人154名に対し、名にまつわるアンケートを実施することができた。アンケート結果からはタイが辿った歴史、タイ人の気質はタイにおけるニックネームの現状と深いつながりがあることがわかった。微笑みの国と称されるタイ。それには、このニックネーム文化も深く関わっていることが伺える。

## 《第3章 日本と名》

日本の人名は世界でも有数の複雑さを持つといわれている。しかし、私達日本人はこの事実を意識したことがあるだろうか。この章では日本人の名が名字と名前から構成されるに至った経緯、それに至るまでの歴史的背景、日本人が理想としてきたものを考える。特に全国約30万にもおよぶと言われている日本の名字の数々の魅力に迫る。そして今を生きる日本人、大学生100名に対しアンケートを実施し、自分達の一番身近な存在である名をどのようにとらえているのかを探った。

## 《第4章 タイと日本一名の先に広がるもの》

誰もがニックネームを持つ国タイ。世界に冠たる名字大国日本。人間が名を持って生活しているという事実は同じなのである。しかし、タイと日本、それぞれが持っている名にまつわる現状は本当にそれぞれの価値観、文化を象徴するものだという思いは日に日に強くなり、そして今はっきりと確信に変わった。名には各々の歴史的事情、価値観、理想が封印されている。その封印を破れば、思いがけない奥行きのある世界が開けてくる。名は人間が存在し、社会生活を営む上で、一人の人間が他の人間・物と異なったものを備えるという独自性・同一性の象徴、アイデンティティーなのである。何よりも尊く、深いものだ。

## 《主な参考文献》

紀田順一郎 (2002)『名前の日本史』文春新書

武光誠 (1998)『名字と日本人—先祖からのメッセージ』文春新書

田中克彦 (1996)『名前と人間』岩波新書

野口卓 (2005)『名前のおもしろ事典』文春新書

泰日経済技術信仰協会 (2003)『日本 クロスカルチャー タイ』東芝国際交流財団助成